

序 日本の伝統木造建築

戦後…効率性・機能性の重視 伝統木造建築自体の否定
↓高度経済成長後～…1975 地方指定文化財・伝統的木造建造物群保存地区
1996 文化財登録制度 2004 景観法 2008 歴史まちづくり法
伝統建築をまちづくりや景観保全の核としてとらえる
失われてしまった建築の（内部空間の）再現
歴史・伝統・地域性の再評価が行われる

第Ⅰ章 社と堂

社と堂は常に最も良質な材料・技術を用いているため、各時代広く影響を与えた。日本建築の最も基本といえるものである。

I - 1 社の建築
社…神社を意味する、先史時代に発生した高床式建造物からの発展
掘立柱と切妻屋根が特徴
棟持柱を用いた構法：切妻を棟持柱 2 本で支える（伊勢神宮内宮・外宮）
梁と束を用いた構法：梁が柱を繋ぎ、束で棟を支える（住吉大社本殿 /1810）

I - 2 モヤ - ヒサシの堂
堂…6 世紀以降に大陸から導入。
瓦と頑強な基礎により社にかけていた耐久性を備える
モヤ：虹梁の上に組物を載せる架構方法で生まれる空間
ヒサシ：宙列を繋ぐ繋ぎ梁の上に屋根を延長しモヤの空間を延長した部分
モヤは頭上に梁の見える高い空間→仏像、ヒサシは低い空間→人間
ヒサシは 4 面につけると入母屋となり、日本建築の多く見られる形式となる

I - 3 和様の堂
和様…小屋組みと基礎が内部から隠され、造作材によって空間の演出を行う
8 世紀後半ごろから構造と基礎の分離
改修で天井が追加される（鶴林寺太子堂 /1249）
天井に加え床板が貼られる（円城寺本堂 /1472）
小屋組：天井上方で屋根重量を支持する
軸組：屋根下方の柱が並ぶ部分

I - 4 大仏様と禪宗様の堂
大仏様…12 世紀末中国建築を参考にした、長大な木材枯渇に対応した構法
基礎から屋根面までの通柱を貫で安定性を上げ柱間の感覚が広がる
天井を貼らないことで建築高さ・重量の軽減
簡略化による加工手間数削減・迅速な施工
→和様とのデザイン面での隔たりにより受け入れられない
禪宗様…禪宗とともに日本に根付く
和様同様、つみあげられた構法
細かい材を柱と柱の間にも配置する詰組
水平材の大虹梁を用いた柱の省略・移動

I - 5 中世の堂
本堂…別棟だった正堂（仏の空間）と礼堂（人間の空間）が一体化したもの
旧正堂は内陣・後陣・脇陣、旧礼堂は外陣
大虹梁による柱省略 / 内・外陣に天井を貼る
軸組と小屋組の完全分離 / 貫による強固な構造
軸組と小屋組の分離によってモヤ - ヒサシの構法を無視し、規模や柱は一の自由度が上がる

I - 6 近世の堂
16 世紀後期～ 17 世紀前半 迅速な建築のための構法・空間が生まれる
仏教の大衆化による巨大な採用される
和小屋；小屋張りと使を並べ貫で緊結した安定した小屋組
立ち登せ柱：天井を貫いているように見えるが実際には梁の下方で止まる柱
縁側を構造に組み込んで拡張し、大量の参拝者を入れる
軸組と小屋組の分離から柱の移動、屋根勾配・形状の自由度が向上
→屋根形状や造形の自由度・複雑性が上がる

第Ⅱ章 楼・閣・塔

遠くから見られること・遠くを見下ろすことが重視される、上方に高い多層建築

I - 1 鐘楼・鼓楼
楼…背の高い重層の建築で、主に鐘や太鼓の音を遠くに響かせることが目的
構造体が上下で分離、2 階を 1 階の上に乗せ積み上げていくのが基本
通減：2 階の柱を 1 階よりも内側に配置し、2 階壁面を小さくすることで上げた時に高さを強調すること（唐招提寺鼓楼）
袴腰：楼の 1 階部分を覆う緩やかなカーブを持つ壁面（法隆寺東院鐘楼）
近世以降は内部の通り柱を用いて屋根を支え、貫で 2 階の床を支持する構法が用いられるようになる
→文化的な外観を維持するために外観は表象的になる

I - 2 楼門・二重門
門…領域への出入り口であると同時にシンボルとしての意味もあり、高く重層の門が数多くある
楼門：軸組を積み上げ通減を用いる、鐘楼・鼓楼の構造形式を応用して誕生（御上神社楼門 /1365、長岳寺楼門 / 平安時代）
二重門：基本的に楼門と同じ構法であるが、上層の柱が長くその中間に 2 階の床面を配置し、 1 階と 2 階の間にはね木を差し込んで下層の屋根を支える（知恩院三門 /1621）

I - 3 楼閣・天守閣
楼閣…禪宗の影響を受けた庭園の一部であり、見下ろして眺望する役割も持つ
柱の位置が違う 1 階と 2 階の構造体を分断し、中間にはね木を入れる二重門の構法を応用し、軸組を床・天井・壁を用いて固める（慈照寺銀閣 /1489）
完成した 1 階の小屋組を一部利用して 2 階を作り複雑な外観を実現する（本願寺飛雲閣 / 桃山時代）

天守閣…見張り台としての高さ、堅牢性・防火性を求め、高層化・石垣・漆喰が採用される
二重門や銀閣に似た構法であるが、高層化するにつれて通り柱を用いて階層を一体化し不安定さを軽減する

I - 4 層塔
塔…明治以前においては寺社境内などに建設された仏塔のこと
大きな通減率で高さを強調する、各層は分離しているが中心の心礎柱が全体を繋ぐ（法起寺三重塔 /706、法隆寺五重塔）
軒下組物が発達し各層強い強度を持つようになる（當麻寺東棟 / 8 世紀末）
遠くから見ることを想定して通減率の低下、内部空間の充実のために心礎柱や気団が消滅する（浄瑠璃寺三重塔 /1178）

第Ⅲ章 農家と町屋

入手可能な材料・技術で建設される住宅は寺社建築の影響を受けつつ独自のものとなり、また農家と町屋大きな相違がある。

I - 1 農家建築の原型
先史の掘っ立て柱を用いて棟持柱で棟を支える構法→
→垂木構造：柱を梁で繋ぎ、棟束・束踏で棟を支える構法
→扱首構造：梁への大きな剪断力・利用できない小屋組内部の 2 点を克服
梁の両端から棟への斜材、扱首を用いる
桁行方向に不安定であるが茅屋根や扱扱首で補強

I - 2 上屋と下屋
梁材の長さ・太さに頼らず空間を拡大していくことが課題
上屋下屋構造：垂木構造の梁の両側に斜材を掛け、奥行規模を拡大する
モヤ - ヒサシに類似 モヤ…上屋、ヒサシ…下屋
四方下屋…桁行方向にも下屋を付加する
→内部空間に独立柱が立つ
繋ぎ梁を用いて上屋柱を部屋の境界に移動する等、柱の移動、除去が行われる

I - 3 農家建築の空間
独立柱の除去が進み室内の独立柱を全て除去できるようになる
上屋柱の高さを下屋柱にそろえて梁でつないで軸組を作り、上屋の軸組を上に乗せる、各室単位の構造ブロックが集合した構成（門在家住宅 /18 世紀以降）
構造ブロックそれぞれの高さが異なり 2 階を作る（吉田家住宅 /1721）
扱首構造の小屋組に開口部を設け通風を得る（旧渋谷家住宅 /1822、合掌造り）

I - 4 町屋建築の原型
町屋建築…街路に対して間口を並べて立つもの
京町家型：密な通し柱と貫で強固な側面の壁体を持つ
短手方向の水平力に脆弱だが隙間ない隣家同士がもたれあう
在郷町家型：周辺の農家建築を参照しており、地域性が強い
通し柱と強固な壁面を持ちつつ、梁を用いて柱を省略する 2 つの系譜を合流した町屋建築が生まれる（旧木原家住宅 /1665 ごろ）

I - 5 町屋建築の高層化
江戸時代に都市密度向上のために京町家型、 2 階の拡充が進む
街路側に水平材を延ばし柱で支えて一部分 2 階建てに（真山家住宅 /1766）
建築全体を高くし街路側の天井を強固にするつし 2 階（滝沢家住宅 /1760）
登り梁を用いて内部空間を高くし居室としての 2 階を作る（大橋家住 /1796）

大屋根の桁にそろえられた柱を配置した軸組に指物を組み込んで 2 階床面を作りその上に和小屋を載せる総 2 階（高木家住宅 /19 世紀前半）
指物を用いることで 3 階の実現や階高のコントロールが行われるようになる

I - 5 町屋建築の空間
豪商のための大型化した町屋建築が模索される
突出部を設けて面積を拡大しつつ採光や通風を確保する（熊谷家住宅 /1768）
凹凸のある概形ラインとともに中庭を設け採光や通風を得る（旧矢掛本陣石井家住宅 /19 世紀中期）
和小屋を用いてダイナミックな空間演出を行う